

## 巻頭言



# デザインの科学の確立を

浦 昭 二†



ある席上で、某氏が「コンピュータ。ソフトなくてはただの箱」と駄洒落をいって話を終ったところ、つぎに立った人が、即座に、

「コンピュータ。ソフトあってもただの箱」

と受けて、話を始めた。当り前のことをいったまなのであるが、私にはコンピュータ関係者への痛烈な皮肉と聞きとれた。

どんなことでも急成長し世の中の注目をあびているものに対して批判や反発はつきものである。それはたんにやかみからくこともあるし、知識の不足や一般へのなじみのなさが原因のこともあろう。しかし、すべての批判がそうであるわけではない。特にコンピュータに関しては的を射た指摘であることが多いのではなからうか。コンピュータが日常生活に入りこんできたといっても、研究者または技術者としてそれを職業とする人はまだ数少なく、周囲からは特殊な目で見られる。専門家として反省しなければならないと、私なりに感じていることを挙げてみよう。

まず第1は、コンピュータは面白く、その魅力にとりつかれるというその魔性からくるものである。すべての学問や技術はそれにとりつかれた幾多の人々の努力によって築かれたものといえよう。ただコンピュータの場合、注意しなければならないのは、他の分野では自然または社会などその対象が厳然として存在しているのに対して、自分の作った世界を対象にすることである。そのため独善的になり易い。そして自分の中に閉じこもり勝ちになる。

第2は、新しい言葉が盛んに出現することからむものである。それはそれでよいとしても、話し相手を考えずに得意げに使いたがる。さらに悪いことには、その言葉の本当の意味を知らないで使っていて、その言葉で何をいいたいのかと問われると、たちどころに馬脚を現わしてしまう。いわゆるかっこいい言葉におどらされて、流行だけを追う姿勢が見られるのである。

第3には、コンピュータに通じていると得意がる人の中には、えてして、それを扱う技能だけにとらわれて、物の理に立ち遅ることを忘れた人がいることである。プログラムを作って一見正しそうな結果を出してしまうと、その正しさを確かめもせず、よしんば正しかったとしても、その意味するところを問おうとしない。

ここに述べたような危惧に当る人はおそらくごくわずかだと考えたい。また過渡期の現象で、そのうちすぐに是正されることなのかも知れない。そうだとしても、これはコンピュータや情報システムの専門家への認識・評価を高めたいとの願いをもつものにとって放置できないさまたげとなる。コンピュータと人間・社会との接触が増加し、コンピュータを単独に見るのではなく、より広い視野で抱えなくてはならなくなっている現在、われわれの問題に取り組む姿勢をいま一度問い直して見る必要があるのではなからうか。コンピュータの利用が進む状況下で、既存分野の人々の中には、「虎の威を藉りた狐」が自分の領域に侵略してきたと苦々しく思っている人が少なからずいると考えられる。

人類の歴史の中で見れば、コンピュータは誕生したばかりであり、これからずっと長い将来のことを考えると、ただ目先のことだけに追われるのではなく、木を育てる気持ちでじっくり取り組む姿勢で臨みたいものである。そのためには、既存の学問の成果をたんに表面的に利用するのではなく、それを尊重する心を備えるとともに、自分としての価値観・倫理観を持ちながらも、いろいろな価値感を理解し他人と協調しようとする謙虚な態度が必要である。また、コンピュータや情報システムの面では、解析を中心とした従来の学問とは違って、システムのあるべき姿を探り、それをいかに設計し実現するかが重要であり、いわばデザインの科学を確立していかななくてはならないと考える。

† 本会副会長 慶應義塾大学理工学部

(昭和61年11月20日)